

地形環境史研究 —地理学と考古学・歴史学の接点—

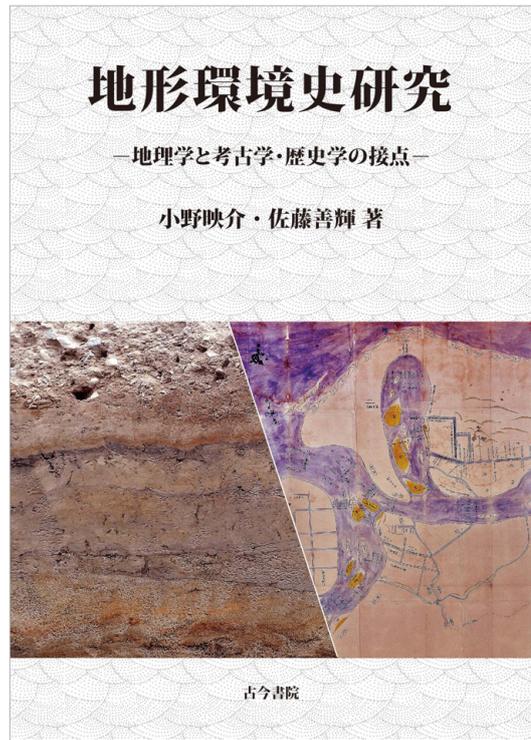
小野映介・佐藤善輝 [著]

(株) 古今書院
発売日：2024 年 5 月 27 日
定価：4800 円 (税別)
ISBN：978-4-7722-5355-0
26.3 cm x 18.8 cm x 1.7 cm (B5判)
ハードカバー
183 ページ

近年、地球規模での地球温暖化の影響も相俟って、沖積平野での自然災害が多発している。特に、梅雨時や台風接近時に線状降水帯が発生し、それに伴う豪雨災害が、日本列島の到るところで、毎年場所を変えながら発生し続けてきている。産総研・地質調査総合センターの付近でも、平成 27 年(2015 年)9 月 10 日関東・東北豪雨によって茨城県常総市内の鬼怒川の堤防が決壊し、市内の 3 分の 1 が浸水する大規模な洪水被害が発生したことについては、我々の記憶にも新しい。

このような自然災害に伴う大規模な地形改変を三次元で捉えたり、これに基づいてハザードマップの作製を検討する場合には、当該地域における数百年、数千年程度の時間スケールでの高解像度での情報収集が必要となる。この際、歴史時代の自然災害伝承碑や古文書・古絵図の解説、ならびに文字による記録が残されてない考古遺跡の発掘調査から得られる情報は、私のような沖積平野の現行堆積過程に関心を持っている研究者にとって、たいへん有効な情報となる場合が多々ある。

今回、私から GSJ 地質ニュースの読者のみなさまにご紹介する書籍は、地理学分野の新進気鋭の研究者である産総研・地質調査総合センターの佐藤善輝さんと駒澤大学文学部の小野映介さんによって今春 5 月 27 日に古今書院から出版された“地形環境史研究—地理学と考古学・歴史学の接点—”と題するハードカバーの書籍である。著者らは共に沖積平野の地形研究で著名な名古屋大学名誉教授の海



津正倫先生の薫陶を受けた海津ゼミの先輩後輩の間柄である。

本書の内容は、地理学と考古・歴史学がオーバーラップする研究領域において、地形環境と人間活動との関係に着目した地形環境史研究を提唱し、その研究成果と今後の方向性を示すことを意図した内容に思える。即ち彼らは、人間活動の舞台としての地形環境の変遷を検討するとともに、人々の土地利用史との関係を地理学的視点(地形環境)から考察することを試みているのである。そして、地形環境を通史的な時間軸で捉えようとするのが、彼らが提唱している地形環境史研究と言えよう。冒頭で述べたように自然災害が多発する現代にあって、土地の履歴とそこに生きた人々の姿を知り、自然との向き合い方を見直すための学問的裏付けとして地形環境史研究の必要性を訴え、彼ら自身による研究事例に基づいて研究手法やその成果を力説している。その上で、世界に先駆けて高齢化時代を迎えている我が国において、自然災害を考慮した新たな居住形態を検討すべきと論じており、これは土地利用の観点からも、たいへん重要な提言と言えるであろう。

本書の目次は、以下の通りである。

はじめに

(第 1 章) 地形環境史研究とは

1. 現生人類の空間的拡散と自然環境／2. 平野・盆地の地形発達史研究と考古遺跡の関係／3. 平野・盆地

の地形発達史研究における古文書・古絵図の活用／4. ジオアーケオロジーとは何か／5. 地形環境史研究の目的

(第2章) 沖積平野の地形・地質の特徴と成り立ち

1. 沖積平野とはどのような場所か／2. 微地形と浅層地質から読み解く地形環境変化／3. 沖積平野を対象とした地形環境史研究の方法

(第3章) 地形環境史研究における高精度地形発達史の構築

1. 山麓扇状地における土砂供給の時期と規模／2. 内陸盆地の扇状地における土砂の動態—平安京左京南部における地形環境変遷／3. テクトニックな沈降域における氾濫原の発達過程／4. 浜堤列平野の地形環境と人間活動

(第4章) 地形環境史研究を通じて自然災害を読み解く

1. 遺跡からみた火山活動と人々の応答／2. 米代川流域で発見された十和田火山915年噴火後のラハール堆積物と埋没建物／3. 徳島県撫養地区における塩田開発と1596年の地震との関連性／4. 九十九里浜平野旧片貝村における1703年元禄関東地震津波の史料と地質記録による検証

(第5章) 過去と現在・未来をつなぐ地形環境史研究

引用文献, おわりに, 索引

本書は全5章からなり、各章ごとに独立したテーマとなっている。

第1章には、著者等が提唱する地形環境史研究について概説されている。第2章の沖積平野の地形・地質の特徴と成り立ちの記述は、著者らの恩師である海津先生が長年に渡りライフワークとして検討されてきた沖積平野の地形環境研究の内容(例えば、七山(2013a)、佐藤・七山(2020)でGSJ地質ニュースに紹介)を継承する内容となっている。

第3章と第4章では、彼らによる地形環境史研究の具体的な事例が公表論文のレビューという形で各節ごとに独立した火山噴火災害、地震災害、津波災害の研究事例として紹介されている。

第5章では、沖積平野の発達史をレビューし、“人はどこに住まうべきか”という居住地(=土地利用)という観点で、今後の地形環境史研究の展望を述べている。巻末には、22ページの引用文献と5ページの索引が整理されて示されている。

著者らが本書を通して主張したいことは、沖積平野の地

形・地質調査において、考古遺跡から得られる各種情報とジオアーケオロジー(地球科学的手法を用いた考古学研究)に基づく解析はたいへん重要だということなのであろう。かつて、地理学者と考古学者は、多くの西日本地域の大学では共に文学部に所属し、地理学者と考古学者の共同研究は普通に行われてきた。しかし最近では考古遺跡を研究対象とする地理学者は、日本国内では限られてきている。これまでは、日本第四紀学会がその媒体的な役割を果たしていたが、学会内でもセクターが設けられて以降は、相互の交流は限られるように思える。考古遺跡には、遺構・遺物から得られる情報と合わせて、なぜ、そこが人々によって居住や生業の場として選ばれ、どのような環境のもとで生活が送られ、そして破棄されたのかを考察するうえでの重要なヒントが埋まっており、それは、本来地理学が扱うべき沖積平野研究の重要なテーマの筈なのである。

なお、本書にも少しだけ触れられているテキサスA&M大学のMichael R. Waters博士が発表された“Principles of Geoarchaeology: A North American Perspective”(邦訳)「ジオアーケオロジー:地学にもとづく考古学」については、私が既にGSJ地質ニュースに紹介文を書いているので(七山, 2013b)、ジオアーケオロジーについてご関心があれば、この小文もご参照頂けると幸甚である。

本稿の末尾として、小野さんと佐藤さんの調査・研究活動は現在もアクティブに続けられており、この書籍でも彼らの意気込みが語られている。産総研を既に退職したシニアスタッフである私の立場としては、今後の彼らが主導する地形環境史研究の更なる発展を期待して暖かく見守りたいと思っている。

本書は地理学と考古・歴史学がオーバーラップする研究領域である地球環境史研究の普及を目的として執筆されており、それ故に、著者たちは、先ずはこれらの関連分野の研究者、実務者や今後、この分野を志す学生に購読していただくことを希望されていることであろう。もちろんこれらの分野以外にも、地質学、土木工学ならびに自然災害・防災学の見地から沖積平野の検討を行っている研究者や実務者にも十分お勧めできる内容と考えている。

最後に私から一点だけ辛口のコメントを述べておきたい。読者の視点から見た場合、本書の図面や写真が全てモノクロ版となっていることはたいへん残念である。モノクロ版とカラー版では読者に与える情報量が大きく異なるし、電子書籍が一般化している現在では、読者のニーズや社会背景とは合致していないと思う。もちろんモノクロ版の図判は著者等というよりも古今書院の伝統、出版方針や



印刷コストの問題であると推察されるが、今後は、地理分野や考古・歴史学分野の書籍においても、是非カラー図判の積極的な使用を期待したいと思う。

文 献

七山 太 (2013a) [新刊紹介] 沖積低地の地形環境学
海津正倫 [編]. GSJ 地質ニュース, 2, 122-123.

七山 太 (2013b) [訳書紹介] “Principles of Geoarchaeology:
A North American Perspective”(邦訳)「ジオアーケオロ

ジー:地学にもとづく考古学」. GSJ 地質ニュース, 2,
251-252.

佐藤善輝・七山 太 (2020) [新刊紹介] 沖積低地 土地
条件と自然災害リスク 海津正倫 [著]. GSJ 地質ニ
ュース, 9, 81-82.

(産総研 地質調査総合センター地質情報基盤センター/
ふじのくに地球環境史ミュージアム 七山 太)